

海吠える 伊勢湾台風が襲った日

表題の本は文藝春秋から 1972 年に刊行。著者の三輪和雄さんは名古屋市南区の中京病院に勤務していた医師である。脳神経外科医として、ノンフィクション作家としても活躍。

話は「それは南から来た」から始まる。米空軍の観測機は、南の海上に巨大な雲の帯を見つける。米空軍はこの台風をベラと命名し、日本の気象庁は報告を受け、台風を 15 号(のちに伊勢湾台風)と呼んだ。名古屋地方気象台は千種区本山近く日和山にあり、超大型台風の襲来に備える。

話の中心は市内で最大の犠牲者を出した南区、なかでも道德(中京病院)と柴田(白水小学校)あたりだ。

写真地図は、伊勢湾台風当時の伊勢湾沿岸拡大図。本書が取り上げている地域は、北は内田橋、南は天白川、東は東海道本線に囲まれた地域と南区役所、そして三重県長島町など。

南区の南陽通りに沿った中京病院は、市内でも有数の大病院である。戦争中は三菱重工業の病院だったが、それを厚生省が買いあげて社会保険病院にした。当時 300 人ほどの患者が入院していた。病院は堀川と新堀川が合流する内田橋から、やや海に近い堀川端にあった。徳川時代の干拓地、紀左衛門新田と氷室新田が出会う、堤防のような土地に建てられていた。病院から南は明治時代に造成された埋立地で、堀川に運び込まれるラワン材の貯木場が多い。

柴田付近の干拓地は、天白川によって二分され、北と南に分かれている柴田新田のうち、北側の土地である。この土地は低く、しかもその西側には 8 号地貯木場が造られ、36 万石のラワン材が収容されていた。堤防は高潮で一挙に崩れ去り、柴田付近の住宅に巨大なラワン材が襲いかかった。多くの人々が家屋とともに押し流されて水に沈み、あるいはラワン材の下敷きになって、生死もわからなかった。

南区の被災地を軸に、「巨人の斧」「海と泥、そして秋」「軌跡」と話が続く。多くの家族の悲劇は、読み進むのが辛くなるほどだ。

あとがきから—この記録の主人公は「水」です。いつもは聖なる泉から湧き出るはずの水が、さまざまな悪魔の姿に化身して、住宅、工場、病院、商店を襲い、肉親や友人の生命を奪い去ったのです。だからこの本のなかには、多くの人々が登場します。ほんとうはもっとたくさんの人々が、苦しみ、歎き悲しみ、絶望の海に身を沈められたことでしょう。



(2016 年 9 月 22 日)